haru。

まる。

さまざまないろを
まぜあわせる

目的もなく　ただなんとなく

そんなときにきまって
すてきないろに
出逢ったりするんだ

恋。

時間を、
自由自在につかっては
きみを想いうかべる

猫の便箋にはこう書かれている

「待ってないわよ、あんたなんか」

猫はすりすりとあまえんぼ
その一方、
どこかふてぶてしい

僕もそんな風になりたい

烏はきらいじゃない

生きることに
貪欲なだけだ

一晩中ねむれなくて

ずっと
これからについて考えてた

只今　05：05　夜明け前

今日をそんな風に生きるかは
自分しだいだね

自信がないの
自信がないのと
口にするけれど

自信は後からついてくるもの

ﾁｬﾝｽに出逢ったら
とびきりのえがおで挑もうぜ

きみと一緒のお布団にもぐる

匂いがね
いっぱいでね

きみが
いっぱいでね

胸がいっぱいになるね

帰った後も
きみの匂いが
服にからだに残っては

僕をせつなくさせるんだ

ひとつの区切りを終えて
新しい始まりをむかえて

きみはどこかやさしい、やわらかい表情になっていた

次会うときは
どんなきみに出会えるだろう

人って
どんどん進んでいくから
人ってどんどん変わっていくものなんだね

「きみ、きみ、
ちょっと演歌入ってるよ」

そんな恋はやめて
もっとﾎﾟｯﾌﾟにいこうぜ

まだ先は長いんだからさ

きみに片想い中

むくわれなくたっていいの

ただきみを胸に抱いたまま
ぼくは歩いていく

いやなこともたくさんある

ぶつかったり
あたたかく見守ったり
心配したり
わらったり

結局、どんなにいやでも
いつもこころのどこかに存在している

せっかく出逢ったんだから
切ってもきれない縁なら

とことんぶつかって

たのしく生きたい
水に流したい
許しあいたい

あと何年一緒にいれるだろう

そんなことを考えて
まいにちを暮らしている

わすれないよ

真夜中、一緒に歌をうたったｺﾄ

このﾍﾞﾝﾁに座って
一日中、景色を眺めてた

隣のﾍﾞﾝﾁにも
ｻﾗﾘｰﾏﾝの男が
何をおもったのか

僕とおなじように
そらと砂浜を
ただぼんやりと眺めてた

どこかやさしいかおをしながら

彼も　かなしいことがあったのかな

ちょっと
独りじゃない感覚に陥って

救われたような気に
なったんだ

そんな春の海

僕はきみがいながら
何度もちがうだれかに恋をする

受け入れてもらえない
かなしさ

たくさん抱え込んでは
きみに出会い

きみに会っては
白夜はぬける

ﾊﾞｲﾊﾞｲ

永遠に続くような
愛をくれてありがとう

ずっと
立ち止まったままじゃ
何も生まれないし
何も見えてこない

ずっと
歩きっぱなしでは
考えもまとまらないし
位置もわからない

ﾊﾞﾗﾝｽよく行こう

見ず知らずのわたしに

精一杯
ぶつかってきてくれたきみは

僕を動かす
原動力だったんだ

なんとなく
この本を手にとって読んでみた

残酷な物語だった

最後に
「あなたはあなたらしく」
と、つづってあった

「わたしはわたしらしく」

さいきん　まわりの人が
わたしにかけてくれることばだった

「あなたはあなたらしく」

考えるよりも
感じたまま
進んでみよう

あのね
きょうね

こんなことがあったの

僕が話すと
きみはうれしそうに
うなずいてきいてくれる

僕らにとって
ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝは
僕らのﾊｰﾄの距離を
近づけたりも遠ざけたりもするけれど

つたえることを
やめなければ
愛があれば

僕らはずっと近くにいれるね